



新装版
毎日が冒険

Written by Ayumu Takahashi / 高橋 歩 著

Mauuchi-Ga-Bouken

Book Title: Everyday is my Adventure!

Written by Ayumu Takahashi

Published by Sanctuary Books Inc.

Printed in Japan.



まいにちがぼうけん

はじまるぜ！



絶 賛

第1の冒険

アメリカ上陸、
茶髪ボーイのカウボーイ修業！

第2の冒険

街へ出る！
ストリートで暴れよう！

第3の冒険

地獄の成功哲学合宿から生還！

第4の冒険

無一文から仲間と店を始める！



上 映 中 !

第5の冒険

ゴムなしバンジー!? 雪山遭難!
死んだらゴメン!

第6の冒険

イルカだ! サイババだ!
自分への旅に出かけよう!


第7の冒険

会社を創ろう! 自伝を出そう!



ピンポンパンポーン






本日はご来場ありがとうございます。
ご来場の皆様に申し上げます。

本作品は、紙上で展開されるシネマです。
本作品は、読むのではなく、観て下さい。
観賞中の、喫煙・飲食・睡眠・入浴・イチャイチャ
等をご自由にどうぞ。

それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。
まもなく上映開始です。



毎日が

自由であり続けるために、
僕らはこの街の



冒険！

そして、自分であり続けるために
ストリートで冒険を続ける



SANCTUARY  PRESENTS

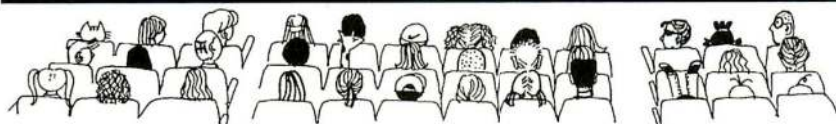
第1の 冒険

GET AN AMERICAN
DREAM!

アメリカ上陸、茶髪ボーイのカウボーイ修業！

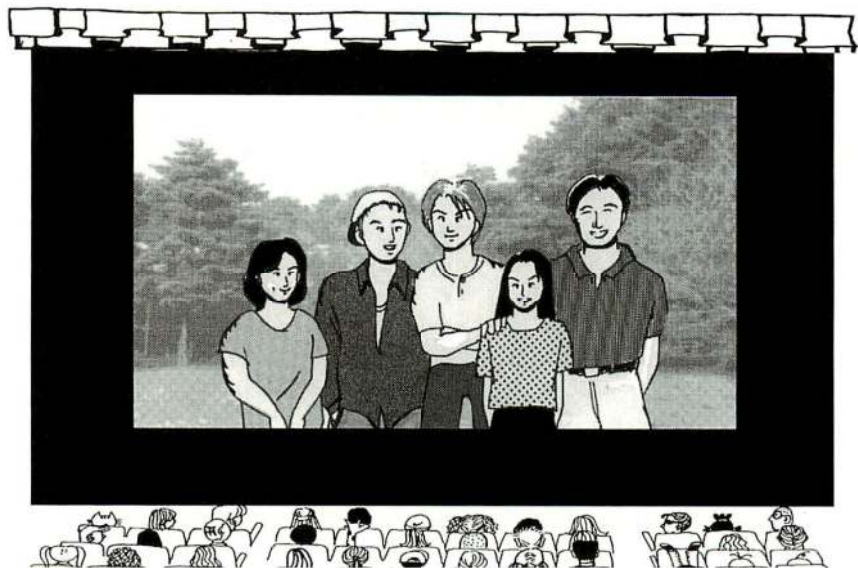


高校3年生の夏。18歳。茶髪。
ストーリーはそこから始まる。



EIGHTEEN-BLUES

～夢が見つからなかった18の夏～



金八先生を地で行くあまり、人間関係の悩みが絶えず、酒とパチンコの日々を送る、愛すべき熱血小学校教師のおやじと、母親としても、幼稚園の先生としても普段は完璧なのに、なぜか家族旅行に行ったときだけ別人になり、異常なまでに金使いの荒くなるおふくろと、もう少し背が高かったら、アメリカンフットボールのモンタナを超えたかもしれない、横須賀学院の天才クウォーターバック

である弟のミノルと、

広末涼子を2、3発ブン殴ったような顔

をしたコギャルである妹のミキ。

そんな5人家族の長男である俺は、とにかくすべてが**普通**^{バンビー}だった。

学校の成績、身長、ルックス、**エッチの回数**、フラれた回数、友達の数、運動神経、アルコールの強さ、気合い、ギャグセンス、エンゲル係数、e t c . . .

どれをとっても**ノーマル。平凡。ふつう。**

それでも毎日はこちらこそ楽しかった。

友達と街に出て、古着屋やバーガーショップ、ゲーセンをふらついたり、誰かの家でファミコンの「ファミスタ」や「ドラクエ」や「マリオ」（殺し合い）に燃えたり、学校からチャリで30分の距離にある湘南のクゲヌマ海岸でサーフィンをしたり、ナガブチツヨシに憧れてギターやハーモニカを練習したり、彼女のマリと学校の近くの公園で**イチャイチャ**したり。

そんな高校3年生、18歳の俺には1つだけ大きな悩みがあった。

それは「夢」がなかったことだ。

正確に言うと、「なりたい職業」がわからなかったことだ。

「これだけは負けないぜ」と胸を張って言えることや、

「スペシャルな才能」ってもんがみつからなかった。

「将来の夢は何ですか？」と聞かれても、いつも答えられなかつ

たし、そんな自分がすごく嫌だった。

「俺はデザインの専門学校に行って、デザイナーになるんだよ」
「私は青森の大学に入って資格をとって獣医になろうと思ってる」

「俺は旅行が好きだから、世界中を旅行しまくって、イカした写真を撮りまくるカメラマンになりてえ。出来るかわかんねえけどな」

そんなふうには**「自分のなりたい職業」**を見つけて、堂々としゃべれる奴らが、俺は心からうらやましかった。

俺だってなりたい職業がはっきり決まれば、超燃えて、がんがん気合い入れて、絶対に成功できるのによ、

と**根拠のない自信**だけはあったけど、具体的にエネルギーを向ける先が見当たらない。

そして、卒業が近づくにつれ、「進路」とか「将来」という言葉を聞くたびに、俺はアセった。

このまんま、すんなり生きていくとすると、たいしてドラマチックなこともないままに、**大学⇒就職⇒結婚⇒マイホーム⇒子供の成長⇒中間管理職⇒不倫⇒離婚騒動⇒仲直り⇒早朝ゲートボール**と、メロドラマ風に平凡な人生が展開していってしまいそうだ。

目的もないままに三流大学にすべりこみ、

サークルとバイトでだらだらと4年間を過ごし、

希望に燃えて入社した会社でも、あっという間に組織にのまれ、

やりたいことも出来ぬまま、やらなくちゃいけないことに追われ、

学生の頃の友達と久しぶりに会っても昔話しかできず、「現実には甘くないね。俺達ももう若くないもん」なんて苦笑する。

結婚が近いので、生活の安定を守るために嫌な職場を辞めることも出来ず、

毎日新しいこともなく、同じレールの上を行ったり来たり。

満員電車ではチカンと間違われ、

ちょっとぶつかったくらいでイライラし、

疲れた顔で週刊誌を読み、

「金があれば、時間があれば」 が口癖になり、
にが笑いや営業スマイルが抜けなくなり、

あっちでほめて、こっちでけなす **2 重人格者** になり、

おせじやでまかせを言うことが平気になり、

給料や小遣いの範囲でしか夢を描けなくなり、

自分の10年後、20年後までもほぼ想像できるようになり、

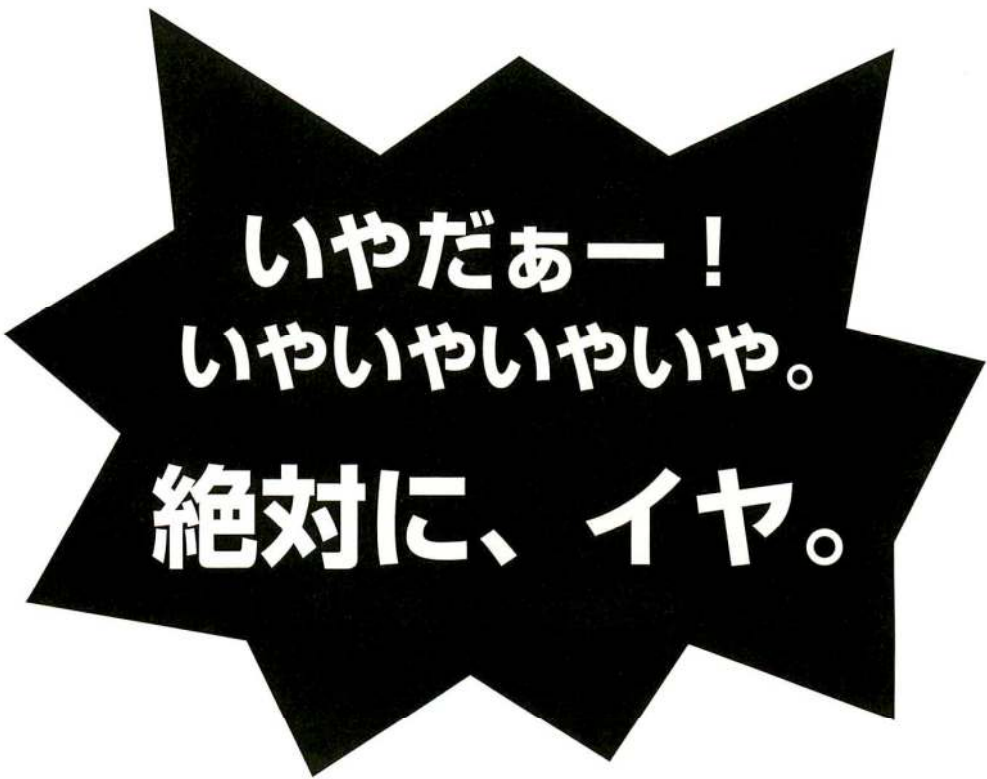
**自分だけが夢や希望を失うのは嫌だから、
他人の夢や希望までも鼻で笑うようになる。**

安いスナックでウーロン杯を飲みながら若い女の子のおしりをさわり、「手がすべっちゃった。はっはっは、ゴメン、ゴメン」と寒く笑い、

酔っ払って団地に帰ると、女らしさのかけらも残っていないマグロの様な奥さんは、もう寝てしまっていて、独り寂しくカッ

ブラーメンをすすって眠る日々.....

中学に入って、少し反抗的になってきた息子に向かって「父さんも若い頃はな、ずいぶんワルで恐れられたもんだよ。はっはっは」なんて、バーコードヘアで太った腹をかかえて...



**いやだあー！
いやいやいやいや。
絶対に、イヤ。**

**そんな「カッコわるい人生」を送るのは
まっぴらじゃ。**

本気でそう思った。

でも、俺、このままだとマジでヤバイじゃねえか？

どうする？

なにをすればカッコよく生きられるんだ？

いつもウォークマンでBOOWYや尾崎やブルーハーツやナガ
ブチを聞きながら、もんもんと考えてた。

焦りばかりで、なんにも思いつかない。

このままじゃ、**まずい。まずい。まずい。**

ずるずるとダサい大人になっちゃう。

もうそろそろ、

マジで自分の生き方を考えないとヤバイ。

流されるままに大学を受験し、番号の見つからなかった合格発
表の帰り。

俺は横浜のタワーレコードをうろうろしながら、今までに感じ
たことのない将来への不安を感じていた。

IT'S ANSWER!

～それが答えだ！～

マジで自分の生き方を考え始めた俺は、浪人生として受験勉強を始める前に、

まず、自分が憧れる**ヒーロー達の自伝**を読み始めた。彼らが今の俺とタメのときに、何を考えていたか知りたくなったからだ。

ナガブチ、ボブ・ディラン、ウォルト・ディズニー、ジョン・レノン、尾崎豊、アイルトン・セナ、リバー・フェニックス、ジェームス・ディーン.....

本屋で自伝を見つけては片っぱしから読みまくった。

読んでいくうちに、俺は自分の勘違いに気づいてきた。

カッコいい奴らは、10代の頃から、「自分はどんな職業につきたいのか」とか「自分にはどんな職業がっているのか」なんて、1ミクロンも考えてないんだ。

ただ**「自分の好きなことを究めたい」**って想いで、必死に頑張っていただけ。

そうだ、俺は「自分のなりたい職業」を探そうとするからわかんねえんだ。

「職業」なんてカンケーねえんだ。

自分の好きなことを徹底的に究めていくこと。

それが大切なんだ。

なるほど、なるほど。好きなことね。好きなこと。

それをみつけて、気合いで究めちゃえばいいんだな。

よしよし、見えてきたぜ。

そんな俺の思いに確信を与えてくれたのは、FM横浜から流れてきた**「夕日評論家」**という怪しい肩書きをもつおじさんの話だった。

「僕は夕日がとにかく大好きで、三度の飯より、下手したら奥さんよりも大好きで、いろんなところへ夕日を見に行っては、独りで感動していました。それを日記に書いたり、写真を撮ったりしながら、他に生活するための最低限の仕事はしていましたが、ほとんどすべての時間とお金を夕日を見ることに費やしていました。もちろん夕日はお金にならないし、家族や親戚の視線は冷たかったんですけどね。いい歳してあの人は、って。でも、そんなある日、どこで聞きつけたのか、ある出版社からお話があり、僕の日記や写真を見ていただいた結果、雑誌でコーナーを持たせてもらえることになったんです。それから1年後に本の出版も決まってしまう。とうとう、**夕日で飯が食えるようになってしまったんですよ**。素敵でしょ。今では、お金をもらって大好きな夕日を思う存分楽しんでます」

このおっさんの生き方、サイコーじゃん！